かたりべ 20

豊島区立郷土資料館だより

湯たんぽ

現在のように、電気アンカや電気毛布が普及する以前から使用されているもので、ふとんの中で暖を取るものに湯たんぽがありました。

湯たんぽは、文字通り容器の中にお湯をいれて布を巻き、ふとんの足元に置いて、中を温めるものですが、一口に湯たんぽと言っても、形状・材質にいろいろなものがありました。

形状では、よくみかける波型の凹凸がついたものがありますし、円筒形のかまぼこ型に近い単純な形状のものもあります。また、材質ではブリキ・銅などの金属製のものや、戦時中に主に使われていた陶製のものなどがあります。

上の写真は、山形市成願寺が長崎第二国民学校の疎開学童を受け入れる時に入手したものです。側面には統制価格を示す「マル公」マークが付され、貴重な資料であるといえましょう。

また、戦時中の物資が不足していた時代には醤油の一升徳利などを湯たんぽの代わりに使用していたという話も聞きます。

これらの湯たんぽも、豆炭アンカとともにいまではほとんど見られなくなってしまい、郷土資料館でも貴重な生活資料として取り扱っています。しかし、もちろん現在、現役で活躍中の湯たんぽもあるのです。

（伊）

歴史講座報告

〝江戸〟以前に思いを馳せて

郷土資料館では、一〇月二八日から一一月二五日までの毎週日曜日午後二時から（第四回は一一月一七日の土曜日午後三時から）、五回連続で**「『江戸』以前～道灌の時代～」**と題した歴史講座を開講した。当講座は、去る一一月二五日に好評のうちに閉講したが、閉講にあたって講座内容の案内をさせていただく予定であった。ところが先日、偶然にも講座出席者からの感想が寄せられたため、これをここに紹介することで講座の内容案内に代えたいと考える。

一〇月一五日　朝、いつものように新聞に目を通したあと「広報」を手にとった。そして「催し」の欄に目がいった時に、ふと視線がとまったのがこの歴史講座の案内であった。講座の趣旨説明には、近世江戸の礎を築いた中世の江戸に焦点をあて、特にその中で太田道灌を軸に講座を展開しようと考えている、というようなことが書かれていた。さらに豊島氏に関しても考察していくようである。確かに、現在漠然と抱いている「江戸」のイメージが、様々な影響をうけて「豪華絢爛」な「花の都」というようなものであることは否定できない。しかしその一方で、こうした「江戸」が古代から営々と続いていたわけではないことも、どこかで了解していたはずであった。私は、「江戸」を再考してみるのには絶好の機会であると考え、早速資料館に電話をかけて申し込みを済ませたのだった。

一〇月二八日、待ちに待った初回の講座。講師は都立大学教授の峰岸純夫先生。演題は「中世江戸と太田道灌の時代」。司会の説明によれば、北関東を中心的なフィールドとして研究を重ねておられるそうで、講演の内容が一層楽しみなものとなった。さて講演は、史料を利用されながら「享徳の乱」を中心に展開していった。特に「太田道灌状」の解釈は楽しいものであった。日頃史料に触れる機会が少ないだけに、史料読解の楽しさを味わうことができた。そして、道灌を「戦国大名」の先がけと評価されたお話の結びには、感動を覚えつつ深く納得したのだった。本日有意義。大満足。

一一月四日　二回目の講師は都立大学講師の藤本正行先生。演題は「道灌時代の合戦」。先生はスライドを利用されつつ、当時の武具の機能の面から、戦闘形態を分析されていった。スライドは、若き日に教科書などで見知った「蒙古襲来絵詞」や「秋夜長物語絵巻」であったため、より一層興味をそそられ、二時間があっという間であった。文書史料もよいが、絵画史料もまた楽しい。

一一月一一日　本日の講師は中世城郭研究会の八巻孝夫先生。演題は「太田道灌と江戸城」。今回もスライドを利用されたが、その内容は先生が直接出かけられて撮影された城郭跡などの写真であった。先生のお話と写真の中に、想像以上に工夫された中世城郭の姿を見て、ただただ驚嘆するばかり。

一一月一七日　土曜日であったため、公用私用の全てをキャンセルして勤労福祉会館三階へ向かう。四回目の今日は、立教大学講師の矢野建一先生が「古代豊島の驛をめぐる諸問題」という講演をされた。五回のうち唯一の古代史であったが、写真や新聞記事を用いられたお話はわかりやすかった。特に武蔵国府への道程を、「神火事件」に際して幣帛を奉られた四社を通して追求されたお話には、思わずひざをたたく思いであった。

一一月二五日　最終回の今日は「道真・道灌と相模・武蔵」という題で立教大学講師の小林一岳先生がお話をされた。道灌ばかりでなく父道真をも視野に入れ、さらに「山吹伝説」を織り込んだお話は、講座の最後にふさわしく楽しいものだった。

五回とも、誠に有意義かつ楽しい講演であった。しばらくはじっくりと、自分なりに「『江戸』以前」に思いを馳せてみたいと思っている。

（桜）

〃池袋〃地区の調査を終えて

本年度で最後を迎えた歴史生活資料所在調査は、池袋地区を対象として、十一月六日から二十一日まで、のべ十四日間行なわれました。調査員は応募のあった二十五名で、調査対象地域は、東池袋一丁目・上池袋二～四丁目・池袋本町一～四丁目・池袋一～四丁目・西池袋一・三～五丁目の計二九四九三世帯でした。調査員のうち半数近くは初めて参加された方でしたが、期間中好天に恵まれ、また区民の皆様のご協力を得て三九〇余件のお宅を調査することができ、当初の予想を上回る資料の所在が明らかになりました。

池袋地区は、昭和二十年四月十三日の戦災により、その大半を焼失した地域であり、戦後から高度経済成長期にかけて急激な変遷をとげた地域でもあります。また近年の激しい都市再開発の波をうけ、池袋の景観やそこに住む人々の暮らしも大きく変わりつつあります。このような時期に池袋地区を対象とした区民参加の歴史生活資料所在調査を実施できたことは、豊島区の歴史や人びととの暮らしぶりを見つめ直すうえで大変意味のあることだと思われます。

二週間にわたる調査の結果、約五〇件のお宅から一八〇余点の資料が当館に寄贈されました。その内訳は、戦後池袋に移り住んできた家で使われていた台所用品・家具類・文房具・娯楽用品等の生活資料が大半を占めますが、このほかに靴修理台・質札・竿はかり・売上帳・算盤・大工道具等の商業関係資料が二一点、軍事郵便・日章旗・千人針・国民服・罹災証明書等の戦争関係資料が二四点寄贈されました。さらに寄贈の申し入れのあった家が五一件余りあり、寄贈資料は今後も増える見込みで、職員一同その整理に追われ、うれしい悲鳴をあげています。

また聴き取り調査では、戦災・ヤミ市に関する話や、戦後池袋の変遷についての話を伺うことができました。また、ヤミ市関係の写真や戦後から昭和三〇年代までの暮らしぶりがわかる写真などもお借りすることができました。

今回の調査に熱心に取り組んでくださった調査員の方々、また調査にご協力くださいました区民の皆様に厚くお礼申し上げます。

本年度をもって、五年にわたる所在調査は終了いたしますが、これまでに蓄積された情報や資料、および区民の皆様とのつながりを生かす形で、今後ともテーマを設けた調査を継続的に行なっていきたいと考えております。皆様のご意見・ご要望をお待ちしております。

なお資料館では、今回の所在調査の成果を基にして、平成三年二月中旬から三月末まで、**企画展『戦後池袋のくらし―池袋の生活資料展―』**(仮題)を開催する予定です。

参加記

足助　勝

この度歴史生活資料所在調査に初めて参加して学ぶべき事が多々あった。先ず当初二日間がビラ配り、以後は所在調査に専念、各家庭を訪問するが殆んどの家庭から対象資料が失われている。戦災や火災は当然乍ら今の時代はポイ捨て世相か、家の新築や移転又は年寄りの死亡を機会にいとも簡単に貴重な物が処分されている。今でも調査区域の処々で旧家が取り壊され跡地に大きなマンションが建設されている。失ってはならないものを見つけ出すには年月の遅れを痛感する。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

緒方由美子

高度経済成長後、新製品にばかり目を向けてきた現在、失なわれつつある貴重な物を、今調査し、聴き取りしておかなければ、これからの人々に当時の生活・様子を正しく伝えることはできないと言う気持ちにかられ、この調査に参加しました。調査を進めていくうちに、本当に大事なことの手伝いをしているのだと力が入りました。古きを訪ねて新しきを知る。私にとりましても良い勉強になりました。…初めて参加し、前に知っていたら良かったのにと思うと同時に、今回参加できて感謝しています。多くの

方に会えたこの体験を生かして、これからの生活に役立てていけたら幸いです。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

安瀬孝子

私の担当地区（池袋三・四丁目）は、戦災後当地に移り住んだという比較的新しいお宅が大半を占めている様でした。疎開していて家具が残ったとか、郷里の父母の使用していた物で、後日貫い受け、「捨てるに捨てられず」、「押入れの奥にしまい込んであるので…」とか。

戦後四十余年、池袋地区の街の大変ぼうは、目をみはるばかりと言われています。昔の生活の様が忘れさられようとしています。この日本人が積み重ねて来た生活の足跡を当資料館の手で後世に語り継ぎ、残していただきたいと、この調査に参加して切に思いました。

このほか、昨年に引き続き、今年も毎日調査に取り組んでくださった倉野保さんや、初参加にもかかわらず効率的に調査・整理をしてくださった早川明利さんからも、貴重なご意見・ご感想を資料館にお寄せいただきました。

所在調査を通して結ばれた豊島区民の皆様とのつながりを、これからも大切にしていきながら、皆様のご要望・ご期待に応える博物館活動を行なってまいりたいと思います。（石）

〈歴史講座のお知らせ〉

社会事業のあゆみと豊島

豊島区地域には、明治中期から昭和初期にかけて、東京市養育院巣鴨分院をはじめ自営館、家庭学校、滝野川学園、マハヤナ学園など数多くの民間社会事業施設が生まれ、その特色ある活動によって日本の近代社会事業の草分け的存在となりました。そしてこれらの多くは、今日においても創立当時の精神を受け継ぎ、優れた活動を展開しています。

本講座では、豊島区で活躍した社会事業家の足跡を追いながら、豊島区地域が日本の近代社会事業の発展にどのようにかかわってきたかについて考えてみたいと思います。

○日程・テーマ・講師

①2・3　社会事業のあゆみと豊島
江東区教育センター　堀切康司氏

②2・10　田村直臣と自営館
巣鴨教会牧師　森下憲郷氏

③2・17　留岡幸助と家庭学校
東京家庭学校校長　今井　譲氏

④2・24　長谷川良信とマハヤナ学園
淑徳短期大学学長　長谷川良昭氏

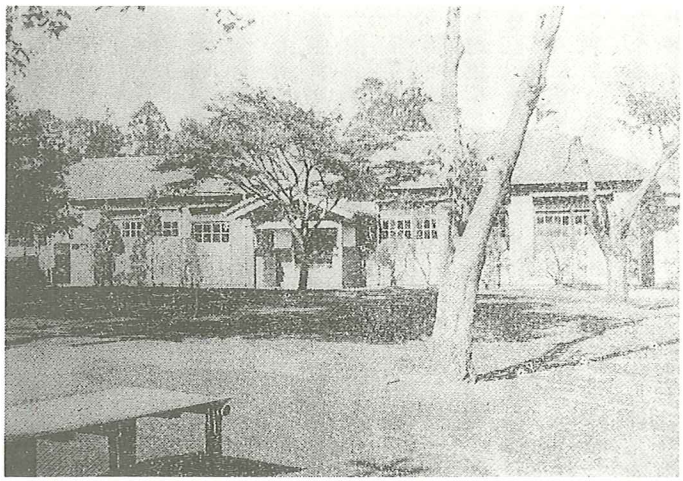
○時間　毎週日曜日の午後二時から四時まで（一〇日のみ午後三時から五時まで）

○会場　勤労福祉会館六階　第六会議室

○定員　五〇名・

○費用　無料

受講希望の方は、資料館にお問い合わせ下さい。



明治32年、留岡幸助によって開設された家庭学校の礼拝堂の全景
（大正14年刊『巣鴨総覧』より）

かたりべ
・
No. 20
・
1990年12月25日
発行
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話03-3980-2351